

データ連携の実務で課題を報告 共通ルール化で生産性向上へ

シーデクセマ評議会

シーデクセマ評議会「した積算・割付のアップ（東京都、藤澤好一理事長）」は6月10日、「シーデクセマ活用」の最新線と将来展望」をテーマにCEDXMの活用状況とその評価について講演会を開き、それぞれの立場から感想を述べた。

尾野幸一氏（野原グループ）は、ゼネコン向けにBIM情報に対して積算サポートとして、石膏ボードや断熱材割付図などを作成する業務を行っている。施工力不足で増えている外国人材などに対応

DXMファイルを使いデータ連携した事例を紹介。通心、金物などデータ修正が必要なことがあると指摘。双方でデータ入力方法や表示の違いなどがあり、入力方法や樹種表記の仕方などは協議会とを提案した。

稲岡真紀子氏（ヨドプレ）は、プレカット工場のCAD室の立場から、設計側とのCAD連携による効果を報告した。手入力によるミスでの手戻りや紙ベイスでの確認作業などの削減により35坪の住宅1棟で40分くらい時間を短縮できるとい

う。一方で、社内でもオペレーターによる入力手順の違いや、常に発注者と受注者が同じではないことによる問題もあると指摘した。

パネルセッションでは、講演登壇者により課題について意見交換なども行った。

CEDXM連携で設計側とプレカット工場側の双方によるデータ入力を不要にするための連携が大切だが、受注競争のなかで常に同じ会社同士での受発注とならないことによるルール化の難しさも指摘された。

松本照夫氏（松本設計ホールディングス）は、CEDXMに初めて取り組むプレカット会社とのデータ連携の事例を紹介。PDFでデータを受け渡した際

の状況を説明した。

椿田龍也氏（アウェア）は、意匠図や実施図の一部についてCE